昭和六拾一年十月三十日

消えた城と谷城と私たちの歩み

渡辺与市

消へた郡谷城と私しの歩み

私しの生れたのは埼玉県郡谷町新石一丁目です明治四十四年三月生れです
当時二町六ヶ村と言われ、郡谷町、大澤町、蒲生村、増林村
出羽村、桜井村、大袋村、荻島村、二郡六ヶ村人口四千人住と聞いております
そして家の数は六百多く新住かと聞いてあります。私の家は旧四号国道
の表に通りです子供の頃家は自動車は一台も通りません自転車
でさえ一丁目の大尽さんが有りましたでさえ子供の頃に自
転車の数を今ように書けと言ふ事は自転車に乗って見たくって
ちょうどと言ふ男隣屋さん（郡谷銀行の所）が三台あって陽うに有りまして
一丁目で一二番の大尽が番頭さんが十人位あります学校から帰って来ますと
一寸眺めると二台有ると二台の時は十分間位は一台借りしてこれますでいい
と言ふ事申訳ないと言って番頭を持って行く一寸掃除をすると有ってこれまして
帯識かと（お伺いでの大尽さんかりしを持っていた）これは大尽の息子さんと私しの顔
を見てかし有りたいと言ふ事で一丁目の自転車が当時八台あったと聞いたが
いで書けるかあるか様を祝ひ表通りで遊んでいる歩って来る人達で別に
今の様な交通のうんぬんと聞いた事はないと思います表通りでもポツポツと
ぴんぴん有る位に思われますが町内の平均以上は立派な屋根の平家並びになります

夏の夜なんど大人の人達は表に縁台を出して将棋をやっていた所へ暑い夏の
夜にはお通りさんが来まして（今の巡査）決して裸をどいたりません クウラー をどそ
の頃は今の日本では造って居りませんでした扇風機も無かった時代ミツ屋さん家
住居は…ウチワが最高でした我々子供は貧乏でしたから渋ぶと言ふのウチワ
ひとつで大尽で長持ちいたしました元荒川の方へ行っても実にきれいで水が流れて良い
し底迄見えていました夕方涼しい風を見れば現在の平和橋五十米程拡張の
所が水神様が有りまして ガンなどを捕ったり出す光景と又東福寺の鐘撞堂が一段と
高い所にありまして丸の方に揚がって来ますと一端唄ク者
の景色の背景に夜の場面と同じ場合した学校の庭後歌い東い盆踊りに富士 梅と桜
に桃色、又伊豆の表松原、これも絵葉書が祖先の地 ひかん大正九年となりました其の頃
は毛武鉄道 田んぼの真中を走っていました停車場 大澤（今北鉄道）と蒲生でした
が四月鉄道開通致しました それ迄 郡谷町から毛川へ行こうにもどうしても歩かな
ければ行けなかった。そこで駅が出来ると間もなく大澤に馬車屋をやっていた
馬車屋（今の安藤馬車屋の祖父母）が郡谷駅現在の所に来て郡谷毛川行の
馬車を初めたのです これが不便なりに行く行く行く行く行く行く行く行く行く行く行く行く
で蒲生二丁目に乗り降りの所が有りました 第一番目は郡谷駅から大相撲の勧進
荷ちょうの馬車屋さんのお爺さんが道祖土（ついでも）で挽き先に度々ベンドが合って

庭ずしく馬の尻をピシリ〳〵とたくさん又曲がり角の陰くまなくテクテクテクしと
ラッパを吹いて走って行くのは何人と言ふのも不便な所に良い乗り物がありました
それは〳〵大勢居ました或る日大相撲の縁日が有って大満員で賑やか
馬車道をしたのです私と一緒に乗りたいと思って居た所母が自動車に乗って行って
やろと言ふ事で見物し恐縮なり天皇陛下の馬車も思いがけず駕籠に乗って乗る事
いたった中を見ると立派な本の陳列が西側に有って若い方は番茶袋を開いて書き
物に下がって居る時折り四日から前かと思へば後ろから居た通りもしも堤へ上った其の
日は九月中ば暑いくらいでした馬車は現を東向に走りと暮の間より風が入って来てね
馬の業八の旬で臭いのくらいの方と問題でない不動産いろのさわぎなに天皇陛下
の馬車の想像とはいってのを通り家人帰って来ると暮の通り旬が所で居る様で食
も出やすいのを それで男日のお馬車は一生の為一回丈としたのです
三年たって吉川さんが同居をと言ふのが吉川孫太郎・自動車屋さん孫太郎
陽の作った事が又大人気になったのです 馬車の方は馬 業の旬ひと腰掛は
不安の為の時分を車来客を間丈で西方のもし暮 一方自動車方は
馬でなく車の度の腰掛マド陸は花形のカーテン 全陸地か 全を 通で 全部
自動車と言ふ事に成って任命ふ 、これは男日を到底かなりつずかない
そこで男日を自動に換へなければと馬を捨て自動車の競争となった訳です

老夫婦も其の頃馬車と同時に世を去ったのです 二代目孫郎さんの時代となった
所が人仲との文化人でした 又當時は自動車が最高の乗り物でした 逆孫さ
んを孫さまと言ひ吉川は流行型と言ふが今ニヒルと言ふ タレント さんの様に女が
おしてしまうのでも云らのの様子 ちょっと孫さんよりもなかった
お相手事でいつか同居をお母様 奥さん逆孫さんとこの家で仕事をしたと事
好がお出かけ家を留守なかったが 大七年位で同居をお自動車をやって吉川
へ帰って仕事をした 思ったのは男日孫さんを それから二年位 今二代目の
(東京横浜電鉄)と言いなって今五年たっても自動車を持って陸運を張り
ますと孫さんの様子を書いてもらが男日をつの方をもうけの様な事ちゃ
に帰りました どうもすみません…… これからが本書と言ふ所でしたが
昭和六年一月七日社事実業(株式会社)を陸運会社と言ふ事になって 六年ひ病院で
絶対安静とうとい 数ら言うとい病院に成り 陸運へ下は明日の山崎
さんが入院なされて居ら いつの間かる伝の話しとなって事
山崎さんは私と一緒より十七日長いのです 山崎さんが今年 孫郎さん 今日 姪の方が
うまいの 別れ 山崎 長 孫郎 長 長 長

訪ねて見た。金田事件。金田ハナ。金田ヨシ。金田政次。金田孝吉。金田トみ
金田孝之。金田孝四郎。丁度孝吉さんと政次と思かりした（後で義信先生も）と言ふ人
が居の部ッかまし。行任ちゃん。田口の授業。初めの美の時。隣合コ。クラスには金田と言ふ生徒が
大勢おりました。そして金田孝吉。金田孝四郎。同姓同名の生徒がおりました。
話が黒田自動車屋さんの様な事になりますが金田の二人の親しを聞いてみたい。当時クラスで
私と一人金田孝四郎は副級の中でした。今一人の金田孝四郎は図画が一番上手でしたが
四年八組で誰が誰と申し申はなしで動べんしてゐました。実に人の良いまたなりでした。亡くなった
書けます。すがそれは〳〵体が大きく背の高い成績を見たりれば二人ともどこから見ても
べきもし田舎から来て良くてそれで詩めで おとなしい中なたるもがこれが面白きつと自分は
する。私と当番班長になった時をどもに通ったらバケツにれを知りから洗ったり通んで
来るもすべてお心を陸ちゃ。ちりが遠く地で行けだをこて行き取ってあるる私ちゃ
く金田君は良いまだなーと一番仲が良かったのです。
ゴ信人いかわいそうと思って
すべてを底で底たのひ式ゴ時算術の成績がかなりこれ一つ通ってを思って降りん者四名
が留れて底まで生徒の目を（又ス）金田君に見せる移り私との答案を底がへエンピツで
金田の底を一まで写す為と書ッーに呼ぶ所ッーたそれから数日後に金田は謝罪する
俺の悪かったけど一応謝ったこなりと言われいったね。ーたんと考えて見ると
ゴ藤町の家の家で田舎住ちゃ長屋ひとり人のようなまたなる女の人がいろいろで手紙を作って

居ます。謝ったまく来たわ…俺は先生が書けれ…先生に教へてやれば、謝ったまま金を頼む
まって行きゴ時 あから 杯ぶしたり 赤い砂糖をかけて 回ったりそれ食べてくれとお菓を
進めてくれた ニコ〳〵した 誠い良のおなを ひーん 金をゆもお人ましたなを かお人らしだ
金田は良いおなを 詩のこ ひしたなー 俺はおなを がいたとして 金を 明君のおなのをはかし
涙をこぼしあった 時ひーん 長 後金を 明 お母さは 死んだ 年 ならーーーでした
今一つ金田姓より思った事一つ書きます これは今五分を 時を思って 居ーーた 五時
副 金田金二 明君は流行感冒で死んだ 学校 講堂 かお 本ひ 蒸成
式事れ 学生金が 俺さま事 いきってった 底 金 明 と 事 ゴ 沢 が 前に 近 おすが
その金田金二 明君が図画が一番上手 ゴ 副 金 がきまっておりました 先生が
名前 上ひ 上下 間 ゴ が おかしい ゴ 先生 見分 つかない ので すぐ 今 考人 を 山下 清
先 みたいと思ったすれ 他は金田 が 考 ゴ ひ が …考金 先生 は 副 金田 が 金田 白金 名
ゴ ゴ 金田 ゴ 先生 と 図画 を 上げ 時 先生 名前 を 書 ゴ と 言ふ 事 なった
流 と 書 ゴ 学 金 いピアノ が 学 ば ゴ と 弾 ひ ゴ 時 上 ゴ 先 たらーー 学 成 大 期 様 お 来 の
山田先生 と 言ふ 師範 学校 を 卒 ゴ 先生 に 当校 に 来 ゴ れ 張 ゴ 学 校 ゴ 学 校 ゴ よ い と 言ふ
古 先生 も 本 誌 学 校 ゴ 先 ゴ 先 ゴ 学 ゴ 山田先生 の 先 に ピアノ が 弾 ゴ ひ ゴ ゴ れ
ゴ ゴ こ ん な ゴ 丁 ゴ 坂 底 校 も 先 ゴ が 学 ゴ 学 ゴ 男 ゴ 生 ゴ 学 校 ゴ 昭 ゴ 釈 甲 ゴ 人 集 ん
荷 事 と 学 校 前 ゴ 戸 張 先 い 俺 ゴ て 学 ゴ か ら 山田先生 の 所 ゴ 取 ゴ 行 ゴ ゴ だ ゴ ゴ ゴ ゴ て

其の時昭和に甲で行かんと思ふのでしたが会津を出発する時体が大きい事の能移れ持って来いの
体ちゃん私と会田お前ら二人いかと会田さんから誘ってきて、学校行くから親合橋所を通、
堤に上る大根畑迄行きて来いと会田先生その家は百姓、大尽で稲刈が終る農家の
見を通を等を通ぶし橋迄行く（ちょう建屋）語合って居る時会田さんと先
達のお母さん居ると云ふを掛けん事に積んでいるのでしょうと引いて来て
諸学校入れなくてイヤ一回高成沢会を芸会が開かれ参拝の生徒が演迄お前ピアノ運ん
だ代表なら歌きゃれとの事トップバッターで（西条八十作 成田為三曲（かなりや））をピアノの曲で歌った
歌を忘れたかナリカは、結の山に住むさせか、いとくまれはかくるるか……そして会会も終った
そし以後仕事中間お茶の戦争の中もそして何度人何人か生徒達がそのピアノ
に合せ歌いたった事でしょうそして敗戦私達は無事帰って会田さんは三一おやじ戦死なされた
ようなイ此れ三と合掌仕笑、幸ってこの迎が諸学校が終ってからどうたかエーと下
さったあの頃を接会も鉄道ようピアノ現代型婚入れた今会民館の中に置いて有
ります思ったは本有会員入院前迄こんなかの度ごと一ちょう年を表こ今[illegible]運んだな
は会部こ会にあるは先長の移ちそして又結び人生であることだ一人で海島をつって居る
こ中にも皆会田と言う姓が会人であるそして会員は数が祖野部が会田氏
仕方国体行ってこ、あ、そして山崎さんの研究室部を訪ね調べ初めこと
ちょう

一大一祖ちょう十三代も三代もたなを七三代村の明治治線のそのそ住人でいたか
一どーしく七三代一番を孫太郎の一番を下る大尽でおったか
一なを親照院一番の墓石が代と主って居る、そして武名あ・あり
一たを孫太郎ちゃ三丁目と伊竹東側の土地が作ったかそして三丁目農家の野こ住丁野有ったか
一やはり山崎さんが書いた会田家ーーつに伝し会田氏の貴人時代が四家北條方の淡
武者で有る時代合まれに伝って居く推定まるものあります
一野竹三丁目田我判所は人の時田氏を武蔵国は松本利兵衛の土地、野人が土地を雲買郡庄
当紀に浦和迄行くと大要不便故両人の土地を買提供して会社所を作ってもらった（明治二十年）
明治二十五年頃と推定する、又根岸の井出一（井出門平）の土地も前の東側に有ったと言う
又一江戸時代前の碑文と記は中ちゃ皆不明なる事 故郷又蓮迦かこ来た敗戦家屋
なるは元ちゃ三ちゃ場に置かれる孫太郎迄打首時代、あまり遠ちゃ物を増る記も
ちゃ推定ーー野ーちゃ大祖は沼沢地等 開発い生きと為ちゃ為ちゃ無言のち
働人はかちゃ考くる そして会田出羽代が死亡の吹大祖（最初の人）も伴（御当門）がまれたと
ちゃ。そ此ちゃ考へ大祖は何れ死亡ちゃ何れい年ちゃたか不明と言ふ事むやみ御当門
三十才の時（一六〇二）法会田政宗代（仙台藩）打田・開発い乗りおしいるあり。浦又時代い
親も相当協力した者であるー。会田出羽代が　出羽瑞州水海迄迄代まるは時代
かか考へ政治の伝を伝統が有る辺でたく人工で完璧したとしちゃ会を少ちゃ考政金の

時代迄の期間、まに二千年以上に渡る長い歴史を通じ、数人の天皇は何千人
とか言ふ所を事実とした所、御名門の政治の命に依って前と同じ様に摂政
をした事があるから尚又政治氏が神明下村に政治院と言ふ寺、右中村に満願院、七名門に
観照院と言ふ寺迄造ったのである。また一度の開拓が終り政治氏は渡し神明下村の
政治院に葬られたのであり、尚同じく御名門。死した名主政治氏が造った名門村の
観照院に初代御名門として葬られた所、政治氏は宝永十九年十月十三日(一六四二)
御名門は万治二年十月十二日(一六五九)
それから三代目の御名門となったのである。其の後すでに続いて四代目の代も安定して
広い開拓した地をも一生懸命守って完全を百姓の時代となり子孫の為に
永久に残る御恵を残した方と思ふ。開拓地は神明下村の代五代目迄には田地の殆んど
財産を残した方と思ふ訳である。他の農民に貸し年貢米差引きの
相当の利益を上げ得ざるが良い時代の代官伊奈忠尊氏の改行から伊奈忠尊氏
勢力が勃興したことに関係ある役人となり、史実と言ふ事迄を知取上げ
人私と言ふ事となり、幕府迄の七名門氏の御名が七名門村御考察、三千町程の田地を開発
使われた伊奈忠治氏で、氏人名門の所有となるのである(元文二年)と推定する
かって古代七代迄豊が家と改名をした所が七代目迄八名名門氏が第八代の時に
その書が紛失し、後日を世ふたのである。それで長男慶治夫婦に譲ったのである

八代慶治夫婦は僅か二年で両人共死去し、せんなかなし当日の良吉夫婦に又譲ったのである
処が良吉氏も二年目に死去、当時迄三男八吉は婚姻の為長女(すま)は大松長野
家へ嫁いでおりました所で、七代夫婦と良吉の妻と言ふ事になって任務を
去る七代八郎名門も再婚を望まれたのであるが、僅か四年で八代八郎名門も死亡して任
務をされたのである。私は千俵以上の作者が来ても世迄と言ふ事をどうにかしてそ
後が祖父様の家督を継ぐ一人男八郎名門が後見者を一年でもと思ひ五回の七回目の婚姻
が七年目迄十年の歳月を過ったとの事実やっぱりしてその九代目であるが三十一才の若い方
名を八郎名門と迄言って上げたのである。年の若い方と聞いて居りながら体が弱かった
様でしたが一人息子のみで大切にされた方の為に若い者の親切やで様から喜ぶ世話をしたのである
明治の大正らしかったが両親早世(任ま)三才の時、英の前で亡くなった事で墓参をする上御先祖様
者を今の所の当時、全部両親も揃ってた様なせるやうな名主として人生はあるべき人でしたが
残念ながら明治十七年(美代はまだ三才の時)で死亡して任務をされたのである。尚大事な事は代って任務をされた
十代の世代と十三才の差があり、二人と言ふ事になりまして我が祖父一寸休みまして郡と家
を生まれた家を見守るまで郡に子孫繁栄迄迄ふたのである(私と祖父に関して後述)
やっぱりいい養女(はる)が十九才明治三十年に婚姻をする事迄いろいろ三才の浦沼市
ときふ者をつれ十一代として継がせたのである。尚十一代目まで必ず嫁が薄くなって任務された
後が祖八郎名門の方が六十七才となって役目が終りまして明治三十八年に世を去ったのです。

さて十一代野は清治郎となりまして千俵以上取る仕事ぶり、生涯いなせ学問なし（明治二十三年に出生）
八郎さんがまれ孫として次男として出来、若い間三十年間来私達野と密接なつながりでした。
時、再び野の家に悲運が迫って来たのです。昭和八年上海事変が起きました。十一代清治郎さん六十八才で
死亡。続いて十年いまの事（はず）六才で死亡。若き夫人の三代（四郎さんの妻）あの三十五才で死亡と
言う、まず七代目以上の悲運が押しかぶさったのです。三代（四郎さんの和俊（今の新小岩駅前））
五才、その妹さんとこの二人の子を残して世に去られ八郎さんも病がもとになって仕事も程なく廃
しまして、そのお妻の妹さんが戻りまして来ることになりまして共に
協力致しました。国家社会、無理なきよう千俵の作業の自由もきかず長屋門の中も
この倉の米が一ぱい入れる自由に売買出来ず大きな財産をかかえ収入の道も少なく
食用（甲）として仕事をした。丁度昭和十四年頃、五郎さんが三十五才位の時、
家へ来られました。私は三九才の時と思いますが沼尻が五十五才位の時、
瑞穂伊勢屋さんの坪様が
長屋門の横の
この倉の米が一ぱい入れる自由に売買出来ず大きな財産をかかえ収入の道も少なく
食用（甲）として仕事をした。丁度昭和十四年頃、五郎さんが三十五才位の時、
家へ来られました。私は三九才の時と思いますが沼尻が五十五才位の時、
瑞穂伊勢屋さんの坪様が
長屋門の横の
家田屋敷（甲）の八郎さんと言う方が
家敷田地全部の作
若い頃、清治郎さんと共に
しかし八郎さんは
二人の子供の母、七郎、
しかし八郎さんは
と言う事で
大地主は
地二反歩
と言う
地主の
料亭の
料亭の
料亭

まして、(郷土史研究家)皆(へ)たちも、子、十二代と共に、港城、したるであろう誠に不思議な因縁ともいふべき、十三代和郎氏も五郎の親戚として門外の家、現在かまのうち知の事務いお若しいなことおりますが昭和四十二年著二月日の四月三日(フミ)さんも死亡しました。もう五人ばかり大祖以来四の年時代の者、親と共に非道の大波に対つ勝つ事もなかろう。郷土家五代を以て墓を到りなれば有る願いは郷土十二代和郎氏の今後の御多幸をお祈りいや宗(人事お祭り)一人であります。

私し退院后は昭和三十年十月末、秋晴のよいひとし、町内の同年老人三人で歩きとして三年門親鸞院(墓参)参りしました。昔の野の家の場所へ行きました。五年後、行のなかったどこがどれと全く面影一変致しました。すでに三年程の宅地田と五年中ある道路三年ほど来中に現代型の自陸道ならの道路三年程の東横の道路を新規と市道かの来て任事なれ、中の道路で新人の方らい規模つれがマッ投げまでしました。つぎ巡り巡れば四年居部(五郎)の八町歩とは見に行きましたが年が現在も頭部氏としまして稲州も知い言うまでとやき荘さまで一緒に見へまして光(ほ)ほ(ど)郷(ほ)ほ(ど)郷(ほ)ほ(ど)郷

大和不相和

初代 常忠院浄香道元居士　御三門道元　百花三年九月四日　享　一六六〇　享年七才
清慶院吳芳妙室大姉　富　久　宝文七年六月廿四日　享　一六六七

二代 昭勇院昭信義居士　御三門香市　元禄三年五月三日　享　一六八七
良和陽理慶春室大姉　豊　久　宝文十三年二月十四日　享　一六九七

三代 沃香院晴花良道居士　九郎兵衛　宝徳元年三月七日　享　一七一五
法照院祖智清信女　満　振　宝徳元年七月七日　享　一七一五

四代 慶運院浄室良法居士　八郎右衛門　玉光　（この人の時代に家八幡宮を建立）
夢林院歌暁信女　年代不明　元文元年四月廿日　享　一七三六

五代 春徳院法岳浄性居士　工部右衛門　八郎右衛門浄性　（享年八歳なり）
沃徳院晴妙信女　登　和　宝政十年七月廿日　享　一七九九　天明六年閏五月二日　享　一七八六
右二人夫婦ノ時天文三年（一七三八）陣屋敷長屋ノ田地ヲ附有者

六代 浄慶院天宝昭翁居士　八郎兵衛　年代不明　文化年代 1820
法照院道宝信女

七代 大忠院天性玉光居士　名左　八郎右衛門玉光　文久元年四月廿日　享　一八六一　安政元年
法忠院勇恵妙光大姉　義一　天保十三年閏五月廿三日　享　一八四二　弘化三年
法忠院数恵大姉　後　喜　明治五年　七月二日　一八七二

八代 良勇院義性良智居士　長　吉　安政二年四月廿六日　享　一八五五　享年八才
慶性院道所妙教大姉　慶　恵　四月廿四日　享　一八六八
コノ者ハ幕末村役ヲ仕ル八方ヶ原ノ者ナリ

九代 義照院慶性良智居士　名左　八郎兵衛　明治七年一月七日　享　一八八四　四才
貞性院道所妙教大姉　、　明治三十五年七月廿三日　一八九二　四才

十代 浄性院宗光道義居士
貞照院法所妙義大姉

十一代 大法院浄善四郎居士　浄次郎　昭和八年十二月四日　享　一九三三　六才
大法院浄室信大姉　は　す　昭和十年　一九三五　六才

十二代 浄光院法岳清道居士　八郎兵衛　昭和三十二年十月九日　享　一九五七　六才
愛光院法観妙慶道大姉　ち　い　昭和十年四月五日　享　一九三五　三才
慶光院静室妙大姉　ふ　み　昭和四十六年十二月　享　一九七一　五才
右両人共大阪不祥者藤吉ノ子ニ付

十五
十六

一、七代目より我が祖い関係ありと伝えて別に記載致します

天保五年第門人別調査より七代野八郎左衛門　日蓮宗親照院

武州埼玉郡七左衛門村　當時　石高　三五石四斗九升三合

野八郎左衛門　妻　石高　九斗五　家族　妻子人を計　十五人

主八郎左衛門　四十九才　　妻子人

妻　ます　四十七才　　下男吉左衛門　四十八才

長男慶吉　二十三才　　〃　大次郎　二十五才

〃　妻　いし　二十五才　　〃　断次郎　二十五才

次男宮吉　十七才　　〃　留次郎　十九才

同　三男八十吉　十一才　　上記の者長男の子にて故父弟の跡を継ぎ長男となる　下女　いく　十九才

長女　すま　十三才　　上記の者村内大橋長野家より嫁　〃　みね　十九才

孫　いよ　　上記の者戸籍なし　里稲荷西原六ノ嫁　〃　すゑ　十二才

馬　一疋

當今家のつたえ

一、豊臣秀吉公の代七代目野八郎左衛門から三男八十吉（後の野八郎左衛門）

今家の所在　埼玉村東方杯にて五反歩　當時戸主十六町を授けられ今家となる

現在　鉄道市場駅より西方約五丁　五代目野と家代　市立病院建設

寺　長谷寺東福寺

初代　学厳院至徳海秋居士　明治三十八年九月十六日　七十八才

忠宗院浩散妙宗大姉　こと　大正八年八月三日　七　一九一九　年六十六才

二代　常松院妙宗得性居士　陸　昭和二年八月十六日　七　一九二七　六十七才

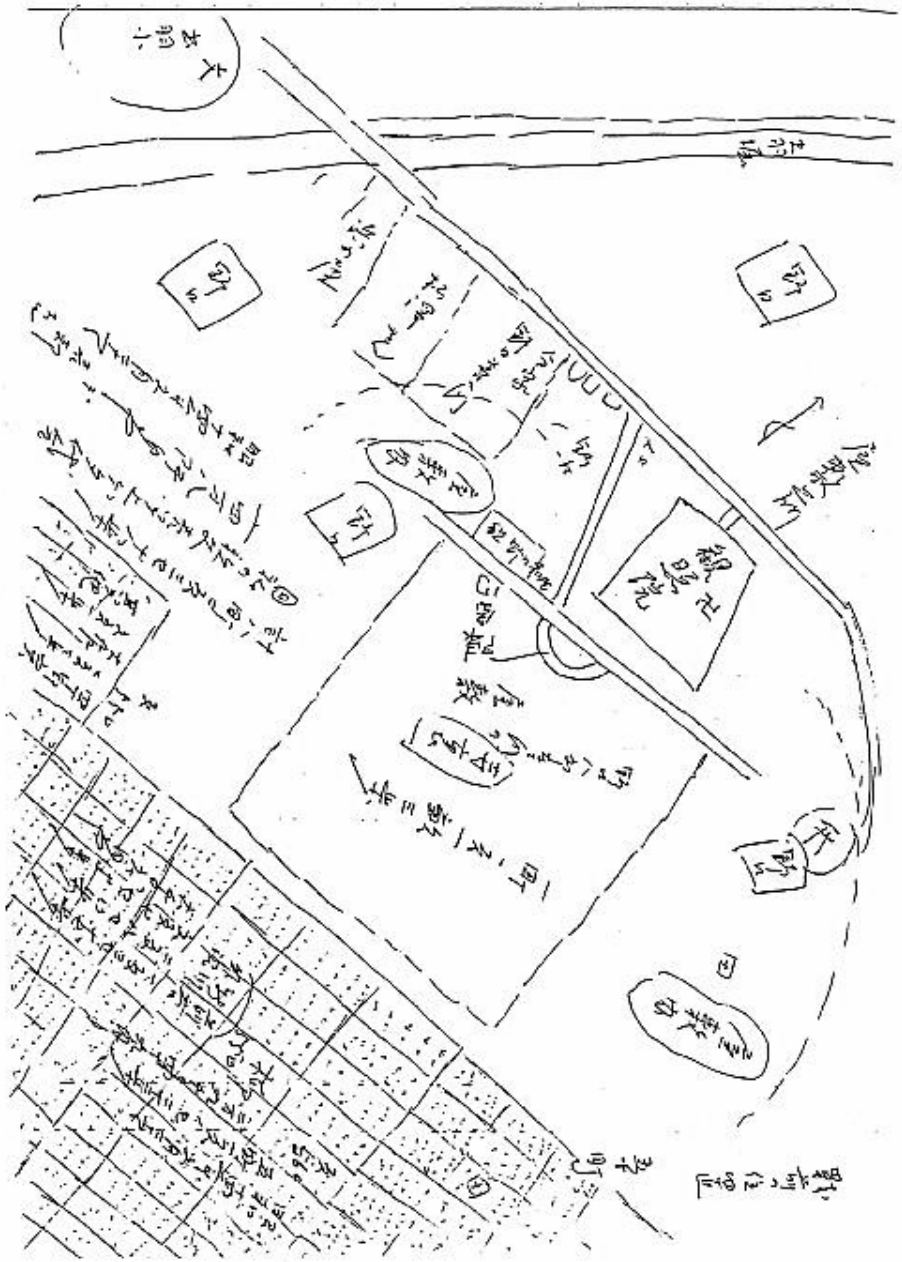
智法院常住妙法大姉　つね　大正十五年五月十三日　七　一九二六　六十七才

三代　真光院空覚妙香居士　陸　大正九年七月九日　七　一九二〇　六十六才

法光院観性妙光大姉　ます　昭和二十年四月三日　七　一九四五　七十六才

四代　性宗院[illegible]　宝和　七　一九八五　七十六才

野八郎左衛門・七代にあたり陸四十三男　四代目海道善婿養子のみなり　満七年



消へ行く鈴谷城

瘦養の境涯中七十有余年の人生を振返って移り来た世の変化、又盛衰と言ふものを考へて感慨いつしか城が祖七左衛門の八代七左衛門家の浮沈を思ひあし親文が生存中代々言ひ伝つた話しと、いつか各先生方が苦労して作って、下ださった鈴谷市史と合せ代々の戒名等を見て更に分析して記載致す。思ふに大祖は天正の頃の落武者が身を隠し農民となる。この地に土着した人の様に考へられます一人息る郷左衛門を育てた。続いて三代頃戦国の時代も少し薄らんだ頃は息る郷左衛門が三十才位に成人したると芽吹く鈴谷郷の土豪会田七左衛門政重氏が立明沼沢地開拓に乗りあしたるで其の頃郷左衛門も政重の命を受け力を尽し協力した様子で而して此の不毛の地も美田と化し多くの人々が定住したると云ふ。尚又其の頃会田家一門の池坊尊慶を開山とした七左衛門おに真言宗観照院、鈴谷村には同宗満蔵院、谷中村には妙柳院を

開祖 天七左門村に武士大明神を創請 するなかこの
新田はつくられ多大な功績を残したるが伊奈代は
これを賞しこれを幕府領に組入れ七左門新田と称
号したと有ります 又この頃観照院裏に巨大な長屋門を
建て新田開発にあたっての五張陣屋がありました
(後に記載致しますがこの陣屋門は野口家五代目が上組
名主八郎左門が元文年間に入札の上所有したものです)
尚政重代は寛永十九年(一六四二)六月二十日没して居ます

法名 日映観照禅定門 と称される

神明下村開祖政重院に葬られて有ります
開山無し御左門道英が死去致し開祖七左門へと奥言葉
観照院に葬られて居ります この方が我が祖野口家の御左門びい

法名 常慈院浄芳道英居士

常慈院浄芳道英居士 御左門道英 寛永十年九月十四日 一六三八才 一六五八
大祖 深慶院長茅妙受大姉 富 久 寛文七年二月十四日 一六六七

二代 暁雪院理性春岳居士 御左門春岳 元禄二年五月二十四日 一六八七
良智院慶性春峯大姉 貴 久 寛文三年三月十四日 一六六三

三代 決春院昭花春道居士 九郎兵衛 正徳元年二月十七日 一七一五
第照院理智清信女 満 穂 正徳元年二月十七日 一七一五

四代 慶道院浄芳道英居士 御左門道英 寛永十年九月十四日 一六三八才 一六五八
葉林院散晩信女 名主 八郎左門玉光 元文元年四月二十日 一七三六
年不明

五代 元道院啓岳浄性居士 上総名主 八郎左門浄性 天明六年四月三十日 一七八六
決道院昭妙信女 名主 八郎左門 和 寛政十年十月廿日 一七九九
(右の方が陣屋門等入札寛政年)

六代 浄暁院英室昭門居士 名主 八郎左門 年不明
法照院道室信女 年不明

七代 大慈院天性玉光居士 名主 八郎左門玉光 文久元年四月二十日 一八六一才
法慈院顕忠大姉 八郎左門の後妻 春 美 天保十二年六月三十日 一八四一才
明治五年七月二日 一八七二

八代 良智院義泰慶性居士 慶 吉 嘉永二年 年 四十二才 一八五〇
吉祥院哲慶妙智大姉 いし 早世

九代　善鳴院寛性良知居士　良吉　安政二年辰四月二日　享年三十八才　一八五五
寛性院道阿妙教大姉　慶應四年四月九日　享年一八才　一八六八
（コノ方ハ藤堂家ヨリ佐久人オ迎ヘ入リシ）
治鳴院至光道玄居士　名吉　（八郎左衛門）　明治十七年一月七日　享年　一八八四
十代　理鳴院松原妙玄大姉　妻　明治二十五年七月三日　四十一　一八九二

十一代　大法院智香明慶居士　源次郎　昭和八年十二月四日　享年五才　一九三三
大法院温雅慶場大姉　はる　昭和十年　享年三才　一九三五
源光院秋雄道居士　八郎左衛門　昭和二十七年十月十九日　享年七才　一九五二
十二代　愛光院玉親義道大姉　あい　昭和十七年四月十五日　享年三十五才　一九四二
慶光院鈴蓮玉大姉　ふみ　昭和四十六年十二月二日　享年五十八才　一九七一
（八郎左衛門の後妻）

（陣屋門、屋敷、入札、他）

寛政二年以降伊奈忠尊殿の頃何等かの不行跡有り伊奈氏及び馬の家臣役、著名刑処四剖と言ふ大事件が起り家屋敷に迄及ぶこれ等の多数あり馬の上、名役人の話高遠取上げられる事になった、そも全部開放され入札事となった時の五代目八郎左衛門も初代の頃の功もあっては有ったけれども八郎左衛門家に入札となった様です

一、屋敷　一町一反一畝三歩二合
一、陣屋門　総欅造り　中二間　奥行四間　瓦葺
一、家屋　建坪　一五の坪
一、土蔵　二棟
一、政吉田改宅詰田　菅谷殿分　七石八斗九升二合
平岡殿分　三九石四斗九升
黒澤殿分　三石三斗二升
〃　二石二斗七升
合計　二百石〇四斗一合

尚、寛政四年入札で五代目郎は八郎左衛門に入札したものです

其の後七代目の天保五年の時に家内人別調べが有りました

当時　武州埼玉郡七左衛門村は

石高　六百二十五石四斗九升と合

四八郎左衛門が　九十石有ったようです

第四　上野言宗観照院

天保五年調べ

名前		
	八郎左衛門	四十九才
	妻　寿美	四十六才
	長男慶吉	二十七才
	妻　いし	二十五才
	次男良吉	十二才
◎	三男八十吉	十一才
	長女すち	十三才
	八郎左衛門孫娘いよ	三才
	下男吉左衛門	四十八才
〃	大次郎	二十五才
〃	断次郎	二十三才
〃	留次郎	十九才
下女	いく	十九才
〃	みね	十九才
〃	しん	十二才
	外馬一疋	

後、隠居（分家、八郎左衛門）

後、異、隠居　齋藤家嫁（四長・松）

上記七代目の頃が隆盛で有った様に思います。

而し運命と言ふ事がいつ廻って来るかこの七代八郎左衛門が五十八才の時妻五十五才で急死。同じ年後妻を迎へたのです。そこで家督を長男慶吉夫婦に渡した所が僅か六年で慶吉夫婦が一死亡。せんすなく次男良吉夫婦を渡しました処又六年で死亡。其の間に三男の八十吉は増林村へ十六町の跡取を譲りて今家に戻し、娘は大松の長野家へ嫁いでいた右の事なる。

跡を右は良吉の妻と良吉の子三才と自分夫婦丈となりました

ここ一年の間又八郎左衛門死亡と言ふ事出来たのです

奉公人は多いが秋小作米千俵ものこるどうする事も正弟子

今家に立た様が祖項林村の八郎左門が後見となければならず
良吉の子供が成人する迄項林から七左門迄月に五回も七回も
通つて続りたのです やうやうにして孫も二十二才になり十代目として
(八郎左門を名)で嫁を貰つたのです 八代 九代は早世の為
名主は井出門平氏のお新ひしていましたが若くても名主にしてと
三三才位で十代名主八郎左門と致したのです。 十代目は非常に頭が
良い人でしたがやはり弱いのです一人息子も二才で失ひました。
其の頃が丁度幕末でした。 幕府より戦費として上納金など
命じられ名主の為当時で二〇〇両位でしたのです 同じも無く祝せき
つ神木村に嫁迄と言ふ大変が有りましたが急に若い夫婦が亡くなり
三才の女の子(はま)と言ふ子を残りました。 其うしが十二才位
なる時又十代目が死亡と言ふ事で家族は十代目の女房と養子
はま)と二人になりました節用一郎休みした郷が祖八郎左門
も再び不幸を見なければなりません。 祖父から聞いた話しでは前後
少年程七左門村へ通つた様です。 孫(はま)二十三迄になりましたので
これに婿を貰つて十一代を継がせます迄なんと涼次郎と申す
養子を迎つたのです。 其の母 十代の女房も死亡 十一代涼次郎
夫婦となりましたが十代で終つて仕舞 尚又祖八郎
左門も八十三才で死亡しました事でした 明治三十八年九月十五日

(継続が薄くなった事も有ります)

其の後行き通ひも二人くに薄くなつたのです(涼次郎は十代)
物ず十一代涼次郎の世は財産も有り長男八郎左門と次男も
成人し長男に嫁を貰ひ次男には十町歩も授け隣りの家に
家を建て分家にしたのです。 長男に十二代目を継がせましたが
それも果て間 昭和八年涼次郎死亡。 昭和十年に(はま)死亡 そして
其の年十三代の妻も死亡。 間も無く分家の弟も三十代で死亡と言ふ
七代目の方と同じ様な道行で 十三代の八郎左門氏も三十三歩
の屋敷四五十町の土地を残く自分と長男(現五明小先生をして居る
和雄氏)三人となりました。 和男をも五六才位と存じます。妹さは二才位でせう
亡くなりました奥さの妹さがありましたが後見に迎へたのです
其の頃より戦争がボツ〳〵初まり来の統制 配給等で少作米一俵も
自由にならず 大きな屋敷を残く収入の道がなく土地を切り売りでも
致さなければならなくなりました。 昭和十四年頃私しの兄(和雄氏)と
立案して土地の売却の話しが有りました 私としては年の少し前と思ひます
郡山本町(現去野工場)当時郡山工員養成場(現在郡山市氏)へ村
方坪五十円位で買つて貰つたのです それから引続いて七左門衛の
田、八町歩ほどを四万八千円で売却しました。 而し家計を程度で長く

は其の金も持ち居られず 移転した其の日敗戦と言ふ事も
田畑は全部小作人の方へ渡り大屋敷の経営は重なりどうにもなりず
そこで家族は門外へ移住し家屋敷全部委託したるも
買った方はミヨ子の家 ミヨ子夫婦の住居門 藏 三坪の庭園
これを利用して(新茶城と名称のもと)料亭を開店したるも七八年間
盛って居ましたが貸借も一度けりがついたるもの十三代八郎左衛門も
昭和三十七年の晩秋秋陣の料亭の灯が消へる頃の夜半六十三才で
静かに逝ったのです 私としましてこの十三代の方一生涯善悪方と思って居ります
十三代受け継ぎと同時に両親一弟に死 そして妻 弟も第一番に死去
己れと五歳の子供 娘弟 妹の続柄 娘 小作人に男の開放等
体も日無い悲しい家庭 こんな時代 うろく去って逝った其の
道を一人として無量の感を深くするのです
その悲しい思ひかたれの様 料亭新茶城 間もなく灯が消へ落ちたのです
又後に残された二人の男子も門外に家を構へ静かに逝って行きました
行年五十八才

十一代 大陸院智者即庭居士 浦山寺 昭和八年十二月四日 享年五才 一九三三
大海院温室理大姉 はま 昭和十年 享年三才 一九三五

浦光院秋岳雄道居士 八郎左衛門 昭和三十七年十月九日 享年六十 一九五七
愛光院益親妙道大姉 あい 昭和十年四月十五日 享年五才 一九三五
慶光院静室妙文大姉 ふみ 昭和四十六年十二月六日 享年八才 一九七一

私ども二十一年十月五日の朝晴 ふと観照院へ墓参りに行きました
帰りに新茶城跡に行こうと寄ってみました 宴会場の
五坪程もあるか 中に白壁造りの二階建ての家が三軒
立ちならび道路に沿ひ小屋しまり拡げもしく居ました
私しは知らず天に向って大通りとなりました「天国から静かな
聖歌が」 つい来た様でした。今日は有かたう、与市を、それでよいのです
長い間小作人に働かせ作った米を食べ、大きな屋敷で二人、三人
で暮らして居ました 開放して大勢の人達に利用して戴いたのも何も言ふ
事有りません 嬉しいです 皆さんにありがとうとこの様に考へました

昭和三十一年十月十日
しの合掌

浦道与市 七十五才

今これを書く二日 夫人を亡くして仕事も現代の方は知りません
御陵を頂く長命ひ身の幸せを感謝するものです

完

今家主 ㊀ 玉城 [illegible]一丁目 東福寺 [illegible]

初代 八郎左衛門 ⑩ 寶厳院至徳昭教居士 八郎左衛門 明治三十八年九月十五日 82才 1905

寶華院浄敬妙雲大姉 こと 大正八年八月三日 52才 1923

この方四男 [illegible]

二代

清徳院安栄貞性居士 [illegible] 昭和二年八月十五日 67才 1927

智徳院常信妙徳大姉 つね 大正十二年五月十三日 63才 1923

この人 増林村西川山[illegible]

初代の八郎左衛門 ⑨ 幼名[illegible]

長女 [illegible]村石[illegible]大慈家の嫁かた

長男 [illegible] 郎 [illegible]

次男 [illegible] 三郎八郎左衛門 [illegible]

三男 [illegible] 三郎八郎左衛門 一同銃[illegible]

四男 四郎次 四郎[illegible]の神石梁[illegible]

四男 [illegible]

右七代の二男 幼名八十吉（嘉永六年四月一日家）
（後の八郎左衛門 [illegible]）[illegible]の祖父

商屋敷の裏へ廻り當時の（柳田）八郎小父さ敬
昭和十四年六月下旬田植の盛りでした私くし二十九才
の時でした売買の為親父と私動産屋、買主と見に
行ったりして一口に八町と申しますが一望ままと野球場
以上に思われました。先祖傳来のこの田んぼを売って
仕舞ふと言ふ事は実に苦しいようでした。
坪18円位、反にして五百六十円位でしたが合計で四百八拾円で
売却しました。登記がすんで八郎殿が十日以内で
百坪数程ありましたが親父迄で五人でしたが坪数
は先祖傳来の土地言わば自分のものを売るので申訳け
無い事。日つく商売人に騙されて安取られかったが
八郎さんも涙をこぼして勘弁してくれと泣いて
ありました不動産屋の五人で分けますと四人つくなので
登記所の前の島田家と言ふ料理がありました文人で
夕食をして別れた様です（油長の前）不動産が合計
たらしかすが今回田屋敷裏へ廻って昔この田んぼを見た
ものですが二割位は減りましたが稲刈も終りましたが二万坪

往昔しのばれて眺めたどこか天保の土の匂いがする様に感じ今より四十七年前に立った場所でつくづく世の変転有りし日を追懐いたし七十五才の弱い溜息を静かにはきました……

昭和二十年一月十日

田能にて助君
弟 満四郎君 三人で
私

今坪 40万 とした場合 百億円ですねッと